
福島秀子の絵画
—戦後の人間像と抽象の方法—

本発表では戦後の抽象画家、福島秀子(福島愛子、1927-1997)の1950年代後半から1960年代初頭の絵画作品を見直し、戦後の絵画運動の興隆における福島の仕事の重要性を位置づけることを目標としている。

芸術家としての福島は、北代省三や山口勝弘らとともに1951年から活動をしていた「実験工房」のメンバーとして知られるものの、名前が挙げられる程度に留まり、彼女が力を注いでいた抽象画の仕事については殆ど研究が存在しない。福島の絵画は当時、抽象的イメージ、即興的制作方法や、多彩なテクスチャーといった特徴から、同時期に流行していたアンフォルメル絵画やアクション・ペインティングと関連づけられていた。本発表ではさらに、2008年頃福島の弟の福島和夫氏のもとで発見された作品や制作ノートを参照し、これらの絵画の多くに人間の顔や身体のイメージが存在することを指摘し、福島が抽象画を通じて日本の戦後前衛芸術の最大の課題であった、新たな人間の表象という問題に迫っていたことを論じる。

発表では下記のような3つの方向から福島の初期画業について考察する。第一に専門的美術教育を受けていない福島が抽象画の表現様式を身につけた過程を、福島が文化学院時代から交流を持っていた前衛画家村井正誠や、戦前からシュルレアリスムに取り組んでいた阿部展也との作品との比較や人的交流の記録を追って確認する。福島は「顔」を頻繁に描いた村山や、戦後の「肉体絵画」(菊畑茂久馬)の系譜に属す阿部から学び、人間を表現する独自の主題と様式を確立したと論じる。

第二に、福島が1954年頃から始めた「捺す」という身体的技法の成立過程とその絵画史上の意義について、当時話題になっていたアクション・ペインティングの身体的行為に関する議論と福島の人間の表象の問題関心とをすりあわせる形で考察する。福島は主に缶や板を使い、それらにインクを付けて画面に押し付けて造形をした。結果として現れる像は、具象性と抽象性、画家の行為の強調と否定の両方を併せ持っている。その方法のなかに、描く画家の身体性と描かれる身体の表象とを緊張関係のなかで関連づけようとする、福島の独自の絵画観の発展を見いだすことができる。

最後に福島の代表作である《ホワイトノイズ》(1959)が、捺される図像と捺す身体行為の間で、踊る人間の姿を隠しながら表していることを示し、「肉体絵画」が目指した客観化とも、アクション・ペインティングが示す自己表現性とも異なる、複雑で重層的な自己意識と人間表象への解釈を提示していることを論じる。

福島が活躍していた1950年代後半は女性の画家が多く輩出されていたが、草間彌生や田中敦子といった一部の例を除き彼女たちの仕事は歴史に埋もれている。今回の研究によって当時の多彩な前衛運動の一端をまた新たに見いだしたい。